クルマエビ増殖に向けて　～稚エビの生態解明へ～

（公社）富山県農林水産公社　氷見栽培漁業センター
係長　尾山　裕幸

１　背景・ねらい

本県では、昭和 52 年より種苗生産・放流を行いクルマエビの増殖に努めてきた。平成 8 年からは、放流種苗サイズの大型化（15mm→30mm）や放流前に馴致を行い、種苗の生残率を向上させる手法を模索してきたが、漁獲量の増大につながる有効な手法は見出されていない。

今回は、他県で行われている稚エビの生態に則した種苗放流の状況を紹介するとともに、水辺広場の池（氷見市北大町）へ放流した種苗の経過観察から分かった稚エビの生態、今後の増殖手法の方向性について報告する。

２　成果の概要

(1) クルマエビの主要生産県において、稚エビの放流は生育場所である干潟や河口付近の浅所に行うのが一般的である。

(2) 平成 23 年 7 月、氷見市北大町に水辺広場及び親水池が整備された。池は面積 837 ㎡で底質は砂であり、2 つの水路を介して海域に繋がる。潮汐によって水位は変動し、満潮時の最大水深は約 30㎝ である。池の環境を調査した結果、ゴカイなど稚エビの餌生物が多く生息していたほか、外敵となる生物の生息数が少ないことが判明した。また、実験により、稚エビが潜砂可能な砂質であることが確認された。池は小規模ながら、稚エビの生息地とされる干潟の環境を備えている。

(3) 池に放流した稚エビを継続的に観察した結果、体長 30mmサイズの個体が主に波打ち際の浅所に分布すること、成長に伴い分布範囲が拡大し、水深 20～30cm の位置にも分布するようになることが明らかになった。また、日中は砂中（数～30mm）に潜り、夜間は活発に索餌行動を行っていたほか、多くの稚エビが夜間に水路から海域へ出たものと推測される行動が観察された。

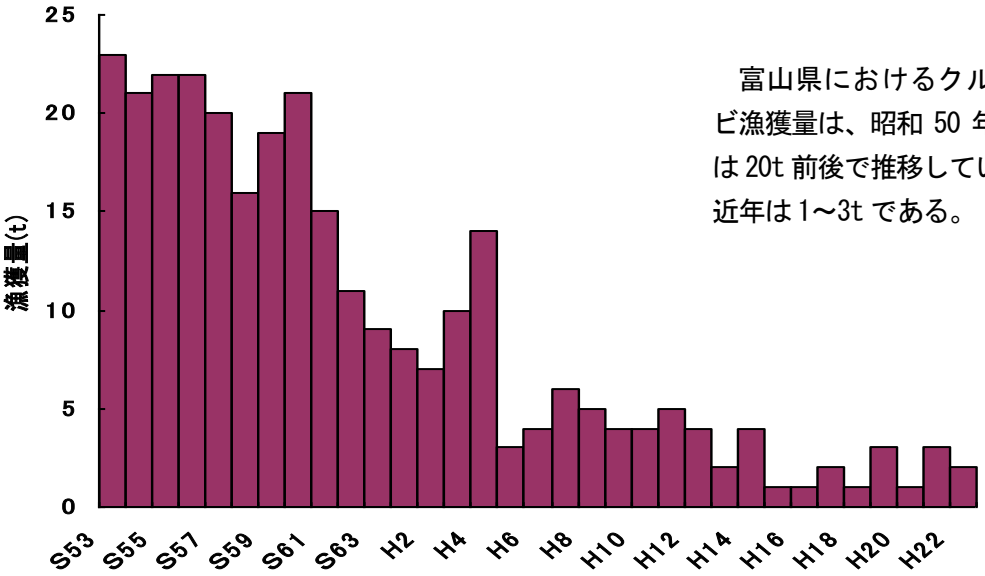
３　成果の活用面・留意点

水辺広場の池に放流した稚エビを継続的に観察することにより得られた知見は、不明な部分が多い稚エビの生態解明への足がかりとなる。今後、クルマエビの増殖を効果的に進めるためには、不明な部分が多い富山湾における稚エビの生態を明らかにし、稚エビの生態に則した方法で種苗放流を行うとともに、このような人工構造物を有効に活用していくことが重要であると考えられる。

４　問い合わせ先

（公社）富山県農林水産公社　氷見栽培漁業センター
担当：係長　尾山裕幸
TEL　0766-79-1521

（参考）具体的データ



富山県におけるクルマエビ漁獲量は、昭和 50 年代には 20t 前後で推移していた。近年は 1～3t である。

図１　富山県におけるクルマエビ漁獲量の推移

水辺広場の池（氷見市北大町）

水辺広場の池は、小規模な干潟と言える環境であり、稚エビの生息に好適な条件を有していた。

日没後に活動する稚エビ

池に放流した稚エビは、日中は完全に潜砂していた。日没後は活発に索餌行動をとる様子が観察された。